

ぼっちの昼餉 〈in 命題前〉

佐倉京

入口をくぐると、そこは聖域だった。

店内を支配する饗しい匂い、時刻特有の雑多な雰囲気、調理場から届く食欲を誘う音、決心を揺さぶる隣人の器、

——目の前に出される、今日の一品。

たっぷりと汗をかいたグラスの横に、それはいつものように並べられる。

とめどなく湧き出す唾液、それを嚥下する喉……。

「——いただきます」

これはとある街中を舞台に展開される、平凡な大学生の昼食ライフを淡々と描いただけ、ただそれだけの物語である——。

第一章：大学食堂 油淋鶏定食（4300円）

私の名前は佐倉京。今をときめく大学生そして麗しの二十歳。とある東京の大学に通っている二年生だ。

趣味は読書と散歩と食べる。特に最近の昼食がてら、大学前の街をうろつくことに熱中している。

とはいっても最寄り駅から学び舎までに走れば三十秒という近さを考えると、いかにこの街が小さなものかわかるだろう。うろつくというより、見つかった飯屋に顔を覗かせると言った方が的を射ているかもしれない。

だが、今日はその趣味をする気分ではなかった。時刻は二時四十分。もちろん昼の方。ちょうど三限の講義を終えた足は、空きつ腹を抱えたまま学内食堂に向かっていた。

今日は晴天。秋口に入った空もつき抜けるように青く、吹く風も寒すぎないほどに心地がいい。

これはもう天気、私に食堂へ行けと囁いていた。なぜかって決まっている。

あその三階には気持ちのいいテラスがあるからだ。重いガラス扉を開けて建物に入る。するとふわっとした暖気にいくつもの話し声と様々な匂いが混じり合った空気が私を出迎えた。

一階でこの食堂の代名詞とも言える「油淋鶏」定食を買うと、その足で三階のテラスに出た。涼風に撫でられるがままのそこはやはり気持ちがよく、ちらほらと他の学生の姿も伺える。

だが、幾人かで群れて座っている彼らとは対照的に、私は一人きりだ。

——食事はいつも一人で摂る。それが私のこだわりであり、短い人生の中でも特に顕著になる習性だった。

理由は色々ある。誰かと話しながら食べるのもいいが、せめて食事中はリラックスしたい。また、せっかく美味しいものを充分にありつけるとき世なのだから、集中してその味を嗜みたい気持ちがあるのだ。決してクラスの連中からハブられてるわけじゃない。誰だ今ぼっちって言ったの。

ともかく、彼らとはある程度離れた席に着くと、私は上着を脱いで鞆ごと隣に置いた。

果たして目の前にあるのは本日の昼餉、油淋鶏である。

いつものようにちよつとした千切りキャベツの隣にからつと揚がった鶏肉の切られたものと、ご飯とみそ汁のセットメニュー。今日のみそ汁はお魅だった。

なんといつてもこの鶏肉、いわゆる油淋鶏が美味なのである。それにかかっている酸味と甘味のバランスが取れたタレも絶妙で、口にすればすぐにご飯をかつこみ

たくなること請け合いの料理だった。

学生からも油淋鶏は「食堂で唯一美味しい」、「これだけはマシ」、「他はダメだけどこれは一応食える」などと好評だ。

「——いただきます」

私も大好物のメニューにありつこうと、箸を入れた。まずは千切りキャベツである。野菜を最初に食べる胃に優しいと聞いてからこの順なのだが……美味しい。オーソドックスな食感だが甘酸っぱくてあっさりした風味のタレが上手い具合に絡んでいて、味の方も中々侮れない。そのせいか歯ごたえもシャキシャキした部分としっかりと分かれ、二倍楽しんでしまう。

タレの香りが食欲をそそり、キャベツによって空腹がかき立てられる。舌の根がきゅつと痛んで、たまらずご飯を一口入れた。この白いご飯も嬉しいことにちゃんと温かくて、そんな当然がちよっぴりありがたい。

そして我慢できずにメインディッシュに視線を送る。この時点で私はもう周りの世界とは切り離され、ただ食べることに没頭し始めていた。

油淋鶏が、舌の上に転がる。タレのやわらかな酸っぱさが口の中で暴れ、さくつとした衣の歯ごたえ、肉の柔らかさ、旨み、その全ての調和が頬の裏で爆発する。美味しい、これだこれだと体が歓喜する。胃は少しでも早くそれを欲し、歯は一秒でも長く咀嚼したくて抵抗する。「口の中で……戦争が起きている……」

空腹による食事、食事によって刺激される空腹感。なんたるサイクル、なんたるジレンマ。堪らず、この旨みを逃すまいと箸がご飯をかき込んでいた。

嘔む度にタレと肉汁が合わさって溢れ、衣のカリッとした部分、ふやけて柔らかくなった部分が互いを認め

合って共和の食感を生む。キャベツを挟み、ご飯を挟み、みそ汁を挟む。美味しい、美味しい、美味しい……。

無言で器に強襲を仕掛けていた私を呼び戻したのは一陣の風だった。外席を吹きぬける涼しさは暴走しかけていた私の熱を冷まし、食事のペースを落ち着かせる。心地いい。

学生の中にはこのテラス席で食事することを恥ずかしがって『羞恥ブレイ』と揶揄している者もいるが、それも意味がわからないくらいだ。

気持ちいいところで美味しいものを食べる。こんな幸せなことが他にあるか。

銀に輝く他のテーブルを、見えない階下から聞こえるかすかな歓談を、気ままに行っては消える風の音を、存分に味わいながら、私は昼餉を楽しんでいた。気が付けば最後に残ったみそ汁を吸い終え、一息ついていて。お腹に充分溜まるのも油淋鶏のいいところである。

ふう。食べ終わったし、図書館にでも行こうかな。お腹が落ち着く頃合いに席を立ち、私はトレイと荷物を持って引き上げる。扉を開けてフロアに入ると、私の中で油淋鶏と双壁を成す「命題カレー」の香りが鼻腔をくすぐった。

次はカレーだな。食べたばかりなのにそんなことを考えながら、私は食器を返却して階段を降りるのだった。

第二章：「フクロ みそチキンカツ定食（5000円）」

曜日によっては二限が空きコマな時もある。私は中途半端に時間が空くのは好きじゃないが、空いた時間を有効活用できないなんていうのはもっと好きじゃない。

というわけで、まだ午前中だけど昼食を摂るとい

のは至極自然な流れとなる。今回も単独行動だ——人生ソロブレイ、いい響きじゃないか。

寂しさなんてどこかに捨てて街に繰り出す。守衛所を境界線にした門から出れば、私はもう自由だ。どこで何を食べよう。

左手には「ムサツ屋」、駅前まで行けば定食屋に他のラーメン屋もある。けど今日はラーメンって気分じゃない。だからといって駅中の「MIRREDカフェ」でランチなんていうのもシャレオツでお高くつくし、何より友達がいな……もとい、ひとりじゃどうも入りづらい。そうこうしているうちに商店街に入ってしまった。

屋前の賑やかな喧騒がどこか肌心地よく、平日だな、となんとなく平和ぼけした思考を辿ってしまう。

だが飯所はスムーズに決めておきたい。「吉野屋」のY字路を気分ですり抜けてから、あと五秒以内に決まないと「すたダウン」になるという自分ルールを設ける。するとどうだ、二秒で行き先は決まった。

「フクロ」である。命題前の定食屋といったらここ。フロンラインで温かみのある美味しいごはんが食べられることと有名だ。

……いや、別にすたダウンが悪いと言っているんじゃない。常識的に考えて昼にアレを食べる勇気が私にはないというだけだ。

もちろん私はあそこの濃い味の豚肉と大盛り白米の組み合わせが大好きだ。ガツンとくるニンニクの衝撃、休憩に頂くシャリッシャリのたくあん、なめらかな生卵とお肉のハーモニー、それに何よりも海苔！何よりもお肉とご飯の間の海苔！あれが一番好きだ。

ちよっと、段々すたダウンの気分になってしまったが、もういいこの際五限の後に行ってしまう。

とりあえず頭を切り替えて、私は商店街の端近くにある年季の入った建物の下をくぐる。

いらっしやーいと店主のおばさまが声を掛けてくれるそこは、既に調理油と先客の食事の匂いがたちこめていた。このお店はいつも十一時を境に人が入り始める。

とはいってもまだ席には十分な余裕があり、私はセルフサービスの水を注いで奥の方に陣を取る。店の入り口から奥へと縦長にカウンターを二つ設けている様子は、なんとというかまさしく大衆食堂のような様相である。手入れの施されたつやつやのカウンターや歴史を感じさせる佇まいから、まるで昭和の食堂にタイムスリップしてしまったかのような錯覚を覚える。

「はい、ご注文は？」

片手に水入りのコップを持ってやってきたおばさまが私の手元のコップに目を留める。「あらやだ、ありがとうね」とほほ笑む姿はなんとも親しみやすさが滲み出ている。こちらまで笑みを誘われた。

「えーっと、みそチキンカツで」

「はいよー」

ちよつと悩んでから「みそチキンカツ定食」をオーダーする。悩んだというのは同じ価格の「肉野菜炒め定食」とだ。

私がラフクロに来た時はこの二つと、あとは「ホイコーロー定食」のうちのどれかから選ぶことになる。なぜかって理由は簡単だ。

この三つが個人的に最強であるからだ。

そりゃもう、ウマイのである。なんとも筆舌に尽くし難いが、肉野菜炒めはスパイスがきてジューシーで、ホイコーローは独特の辛さがやみつきになる。

本当に、冗談抜きで毎回ご飯が止まらなくなつて大

惨事なのだ。

そして美味いではなくウマイと表現したが、味付けもどこか懐かしいおふくろの味で、上品でこそありはしないものの、そんな観念とは一線を画したがつつきたくなるウマさがここにはあるのだ。

「はいお待ちどうー」

考えをめぐらしていると頭上から声が降ってきた。見遣ると、おばさまがお盆の上によそつたご飯を置き、みそ汁を置き、生卵を置いて渡してくれるところだった。待望のみそチキンカツ定食を受け取り、その光景に思わず湧き出した唾液をぐくりと嚥下する。

小鉢よりもふた周りほど大きな器に鎮座する、チキンカツ。それは見るからに揚げたてなのが判るほど綺麗なきつね色で佇んでいた。その数、二枚。

香ばしい匂いも鼻をついていた。若干馨るこげのような香りも旺盛な昼の食欲を刺激してやまない。隣の白ご飯も大学食堂のそれより山盛りで、満足すること間違いない。わかめが入ったみそ汁も存在感たっぷり湯気をくゆらせ、私の視線はお盆に食いついて離れなかった。

既に喉の奥は食べ物を欲して痛み始めている。待てないとばかりに手は割り箸を取り、口は試合開始のホイッスルのように、早く短く、言葉を口ずさむ。

「いただきます」

今、レトロ口といった言葉がこの上なく似つかわしい食堂で、至高の定食との戦いが始まる。

ひとまず狙うは言うまでもなくカツだ。みそチキンカツと言うのだからもちろんそれはみそダレに半身が浸かっている。箸で裏返し、タレをまぶし、……一口。

瞬間、濃厚な味噌の甘みが口内を奔流する。

それだけじゃない、間を置かずして歯から伝わるカ

ツを割く食感、肉汁、衣、油。どかんと一気にみそチキンカツの全てが口に流れてきた。

その全ては暴風のように舌先から喉まで暴れまわり、私は味の勢いに目を白黒させる。

「これが……総力戦……ッ！」

私の口がひとつしかないからって戦力を集中させてきやがった。卑怯すぎる。ともなればこちらも負けてはられない。なにせ最強の味方・ご飯がある。白きかたまりをすくって放り込むのに、コンマ二秒。

まるでその行いは試合中の碁盤をひっくり返すがごとく荒技だった。もちもちのご飯が揚げ物特有の盛大な旨みに正面衝突、大爆発。何もかも吹っ飛び、絶え間なく、ご飯とのお伴であるおかずがぶつかりあう。しかしやがて、みそカツの甘みとかすかな塩気、ジューシーな食感が私の中で満足感に取って変わっていく……。

飲み込み、水を飲んで、一息。

——争いなんて、なかった。

熱々で美味しかった。何もかも平和だった。争いなんて、なかったんだ。みそチキンカツとご飯がぶつかり合うたびに完璧な調和を成したのと同じで、人類だって思いきって正面向いて語り合えば、必ず解り合えるんだ。気がつけば、私は泣いていた………というのはずがに冗談だが、というか争いも何も私が勝手に定食と戦っていただけだが、いや、そもそもなんかおかしいことになってないか？

私は何を言っているんだろう。少し錯乱していた。

「……あれ？」

今度こそ気がつけばだが、目を遣ったお盆の上、みそカツもご飯もみそ汁も、そのほとんど消えてなくなっていた。それもカツの器にはいた生卵がかけられてい

て、これは他でもない私お気に入りの食べ方である。

これをするとかツの食感、味噌ダレの舌触りにまるみが出てなお美味しいのだ。いやそれはいいとして。

無意識で……食べていただと……!?

そんなことあるか、いや、まさか。

「あっ」

いつの間にか全て食べ終えてしまっていた。ヲフク口独特の塩気が強いみそ汁を飲み干し、ちょうど左手がお椀を置くところであった。

なんだか悔しかったが、どうやらヲフク口の味には想像していた以上の魅力があるらしい。私は負けましたとばかりに席を立ち、おばさまに五百円玉を渡して店後にする。

それにしても、ワンコインっていうのは嬉しい。

商店街の通りを再び歩く頃にはちょうど昼時になっていて、先ほど聴いた喧騒も、ひときわ賑やかなものになっていたのであった。

第三章…上海亭 マーボー豆腐定食 (500円)

私は昼休みに昼食を摂らない。

その一番の理由がどこへ行っても混雑しているからだ。学内食堂や大学横のムサツ屋は言うまでもなく、街に出てよほどいいスタートダッシュを決めなければ行列に立ち並ぶことになる。

いくら食べることが好きとはいえ、昼時の空腹に任せてただ並ぶというのは私のこだわりを反した。多少時間がずれたとしても、流れるように店に入り流れるように注文をして、しばらくせずに食べ始めるとというのが私の中の美なのである。

……決して並んでいる間の話し相手がいないからで

はなく。

ともあれ、今日も三限を終えた私はスカスカな胃袋を抱えて街を歩いていた。

今日は何を食べよう。ラーメンじゃない、ヲフク口って気分でもない。すたダウンもいいがあそこは餓死寸前に大盛りで食べたい。そうなると、後はひとつだ。

中華。

中華である。命題前の知られざる中華屋は、駅前の橋を渡ってすぐの右手にあった。パチンコ屋の階段を上にあがると大手チェーンの牛丼屋が見えるが、その奥だ。

白字に赤の文字で「上海亭」と書かれた木の扉を開けると、ドアに付けられた鈴が元気のいい音色を奏でた。「いらしゃいー。お好きなカウンターどうぞ」

店内は外と比べて少し暗め。フロアにいた中国人のお姉さんの上手な日本語に案内されて、私はカウンター中央の椅子を引いた。

反対側から水を注いで渡してくれるお姉さんにささず注文。

「マーボー豆腐定食で」

「はいマーボー豆腐ねー」

他にメニューは山ほどあるが、ランチタイムの定食はいつもこれだ。というか、これを食べるためにここに来ていると言っても過言ではない。

確かに他のセットも美味い、捨てがたい。天津丼セットは天津飯の餡が甘みと辛みを色濃く主張し、けれどご飯の存在を塗りつぶさないよう考えられた絶妙なバランスを誇る本場の一品だし、五日焼きそばセットは海老も含む七種類ほどの具が惜しげもなく使われた大量の餡ならびに太めのかた焼きそばが嬉しい満腹必至の最強メニューだ。葱チャーシュー麺セットやマーボー麺セット

もまだ挑戦したことはないにしろ美味なこと間違いない。

だが私はマーボー豆腐定食を選ぶのである。理由は単純。

群を抜いて、これが好きだからだ。以上。手持ちぶさただったので周囲を見回すと、オレンジの電球に照らされた、落ち着きながらも洒落た雰囲気湛える店内を眺めることができた。

ちなみに席は私が着いているカウンターだけでなく、二人から四人用のテーブル席がいくつかと、大きな中華テーブルが存在する。

中でも一段と目を引くのがそれだった。五、六人は座れるだろう立派な中華テーブルは店の雰囲気静かにマッチしており、自分が今中華屋にいるのだということ改めて認識させられる。

「お待たせしましたー」

不意に声が聞こえると共に、木製のカウンターに四角い盆が置かれた。待望のマーボー豆腐定食である。

大盛り気味なご飯と、ちよっとしたサラダにザーサイ。とろみのついた黄金色の半透明のスープにはレンゲがもたれている。

そして中ぐらいの皿には主役のマーボー豆腐が綺麗な赤茶色を照明にきらめかせていた。

「いただきます」

これ以上、言葉はいらなかった。手早くサラダを平らげる。キャベツを刻んだサラダには酸っぱめのなんともあつさりとしたドレッシングがかけてられて中華ひいてはマーボー豆腐の相性として抜群なのだがそれを描写する猶予など存在しなかった。

マーボー豆腐。銀のスプーンを使う。挽き肉とたつ

ぶりの刻み唐辛子が泳ぐ餡の中、これでもかという量の豆腐が胸を張り、その上にはネギの緑と胡椒の黒がマーボの赤茶色を見た目・香りで引き立てる。

完璧だ。そして味も……完璧。

美味いかそういう次元の話じゃない。完璧だ。紛れもないこれは私が食べる完璧なマーボ豆腐だ。

舌の上で崩れる豆腐。噛むごとに力強い食感と満足感を味として残してくれる挽き肉。舌の上でツンと抵抗してからかき消える黒胡椒。歯のどこかでしゃりつと優しい音を演奏するネギ。飲み込むと引き潮のように喉から鼻に抜ける、辛み。

その全てが主役だった。そして私は観客。

このマーボをただ楽しむだけに生きる、一人の顧客。

恍惚とするほどに美味しい。危険だ。このマーボは法律で取り締まった方がいいんじゃないか？

「朝というと今朝は電車が止まてましたね」

「ああ大変だったよ。井之頭線使った？」

「ええまあ。私が来た頃には運行してましたが」

「よかったじゃないの。ところで灰皿もらえる？」

知らないうちに奥の席で背広のおじさんがお姉さんと会話をしていたが、それさえ良いBGMだった。

マーボの大胆かつ繊細な味付けの相伴に、白いご飯をやはりかっ込む。ここのご飯は一杯ならおかわりできるから容赦なくいける。

いや待て、だからって焦るな。落ち着いて味わえ。

だが脳内に制止がかかって食事のペースを緩めることにする。そうだ、いつも忘れてしまうが美味しすぎて気付けば食べ終わってしまうのだった。

一息入れる思いでザーサイをつまむ。調味料皿のご

とき小さい器に盛り付けられたそこにも刻み唐辛子は見られ、口の中を転がるしょっぱさとぴりつとした刺激こりこりとした食感が私の精神を安定させてくれた。

これも、美味しい。実はこのザーサイも、私はマーボ豆腐と同じくらい好きなのだ。

ご飯を挟んで、スープのれんげに手を伸ばす。充分にとろみのついたたまごスープは香りもよく、味わいも穏やかなものだ。

再びメインディッシュを口に運ぶと、横から煙草の煙が鼻をくすぐった。私は吸わない人間だが、吸う側からしても灰皿を置いているこの店は魅力的なはずだろう。

「あーすいません、黒チャーハンセット。あと食後にコーヒー持ってきて」

いつの間にかやってきていた他の客の、注文の声。それから私は、自分の世界に入って黙々と食事を続けた。辛くて美味くて、お冷も進む。ザーサイも、いい。

やがてべろりと間食すると、五分ほどの食休みに入った。その後、頃合いを見て上着を着ると、出入り口横のレジで会計してもらってバッグを肩に外へ出た。

冷え冷えとした秋の空気が、香辛料に温められた体を音もなく通り抜けていく。気持ちがいい。

来る時に上った階段を下りると、背広姿のサラリーマンたちが、入れ違いに階段を上ろうとしていた。

「この日替わりがな、どれももうまいんだよ」
「へえ、来たことありませんでした」
「煙草吸えるのか？」
「灰皿置いてあるらしいですよ」

「じゃ俺ちよつから席大丈夫か訊いてくるな」
大柄な男性が右手をひょいと挙げて、軽やかに段を

上がっていく。

席は充分空いていた。あの人たちはきつと、あの中華テーブルに座るんだろうな。

そんなことを考えるとなんだか面白くて、私はにやけてしまいがちなおじさんたちとすれ違っ。

足は大学へ戻ろうと歩き始めていた。

今日は何曜日だっけ、五限の科目はなんだっつろう？

第四章…命題屋 塩ラーメン(680円)

人は苦悩する生き物だ。

そして人である私はそれが定めであるかのように、今まさに苦悩していた。

——事は一分前に遡る——
さつきまでヲフクロへ体を運んでいた私の下半身は、突如釘でも打たれたように歩行を停止させていた。

原因は不明。ただ、何かがヲフクロへ向かう強い意志を邪魔してこうなっていることは理解ができる。

一体なんなんだ、私は一刻も早く肉野菜炒め定食が食べたいだけだというのに……逸る心で額に汗を流しながら、つ、となんとなく首を横に向ける。そして。

——ラーメン「命題屋」。

「……お前だというのか……!?」

戦慄した瞬間これが原因だと直感した。判断に時間など必要なく、まるで悟りのように、この店が意思を拮抗させヲフクロへ歩く体を射止めているのだと理解した。

なんだこの店名は……まるで私が今日ここへ入るとは、運命づけられたことだとも言うのか……!?
いやしかし、私は朝から今日は肉野菜と決めていたんだ。今ここでラーメンを食べるわけには、いかない。

だが食べたい。正直になると、私の体はこの家系ラーメンを欲していた。

「つらっしやーい！」

だがそれでいいのか？ ラーメンなんて唐突すぎないか？

「奥のカウンターどうぞ！ お好みは」

「麺かため他普通ライスで」

今日は定食の気分だったじゃないか。あの肉野菜の味を忘れたのか？ ヨフク口の味を、裏切るのか？

「はい前から失礼しますね、お水！」

「はーい。……はっ？」

あれ？ お店に入ってしまったっているぞ？

まあいいや。欲望に負けた私は自らの弱さを実感しつつ、気長に待つことにする。

それにしてもすごいお店だ。入口から最奥までカウンター席がずらりと並び、さらにそこから横手に奥まったところにいくつかテーブル席がある。長屋のような店。それにこの手のラーメン屋は基本こうなのだろうが、

店員さんの活気も目を見張るものがある。声も大きく、気を抜くとビビってしまう。

「はい麺が、上がりまーっすー！」

「上がります！ 上がりまーっすー！」

加えて決められたコールなのだろうか、気合いの入った声が、誰かが麺を上げる度に叫ばれる。

これはこれで気が引き締まるような気がしてテンションが上がる。こんなコールは羞恥心の強い人にはできないだろう。

「……私がやってみたらどうなるだろう？」

「めっ麺が、あっあっ、あが、あっ……！」

やめたやめた。

「はいお待ちー、かための塩ね」

ちょうどいいタイミングで頭上から声がする。自分のコミュニティ障壁合にブルーになりそうだったが、受け取ったどんぶりの中を見て、思わずつばを飲んだ。

太麺、厚めチャーシュー、二枚の海苔、うずらの卵。

見た目はよくあるラーメンと同じだが、脂の光沢や塩気のある香りが食欲を倍以上にかき立てる。

「スープの濃い薄いあつたら言ってください、やりませんで！ あとライスはおかわり自由ですよ！」

コトンと黒いお茶碗のライスが台に置かれる。ちょっとしたサービスマタまらない。

家系で塩を食べたことがないためにこれを選んでいたので、どうやら私の判断は正解だったようだ。

白い湯気が上がるそこに箸をさす。麺を掴んで啜りあげるともちもちした歯ごたえを迎えることになった。

絡んだスープも濃厚で、口いっぱい塩っぱいけどなんだか甘くも感じる、やわらかな味わいが花を咲かせた。

「……家系はかた麺に限る、な」

やや止まらなくなり、麺を啜ってはレンジでスープを飲むを繰り返す。先ほどやわらかな味わいと表したがそれでも確かに家系だ。飲んでいてこれは飽きないぞと断言できる自信の傍ら、このスープはご飯が欲しくなる

ほどの深みも兼ね備えていた。

海苔。半分浸したものを食べるのが私の好み。……

美味い。卵も半分に割ってスープに浸すのだが、これも言わずもがな。

やはりこの、塩ではあるのだけれど奥に控えたかすかな甘み、それだけに留まらない脂の風味も押さえた

スープが食べる者を魅了してやまない。麺を、ご飯を聞に入れながら、スープをレンジで掬って舌に流す。

チャーシューも噛みごたえがあつて満足ものだ。やはりコクのあるスープによく合う。

ラーメンの命はスープというが、あれは本当なのだと痛感した。……スープっていうのは「ラーメン三銃士」だと誰に当たるとんだけ？

まあ、あとで調べておこう。

「すいません。ライスおかわり」

こうして私のお昼ご飯タイムは、今日も今日と過ぎていく――

第五章・コイヌール チキンカレーセット (790円)

急にカレーが食べたくなった。生きていればそんな気分になることもあるだろうが、今回の私がそれである。

ただ厄介なことに駅前にカレー屋を知らなかった私は持てる人脈を総動員することになった。

そう、人脈。私が有する全ての友達に連絡を取って訊いたのである。――そして返事をくれたのが、十人中二人。片方は駅の南側の「ドコ吉」を、もう片方はここ

「コイヌール」を教えてください。繋がりがつて、大事。さておき。そんなわけで私は今、商店街奥の建物の

二階にあるコイヌールで椅子に着いている。席は出入り口傍、カレーはオーソドックスなチキンカレー。

メニューを眺めながら待っているとお楽しみのおかげがやつてきた。カレーなんてお皿に掬って終わりかと思っていたら、思ったより待ったのが意外だ。

期待を抑えつつ見やると、駅前でも時々チラシを配っているインド人の方が陽気にお皿を置いてくれる。ちょっとしたサラダに加え、深い器になみなみと盛られたカレー。それに思わず目を見張る。

なんというか、これはすごい。

器はサラダのものより一回り大きいくらいの一般的なもの。ただ、そこへ綺麗によそわれたカレーは見る者を思わず感嘆させてしまうほどの気品を湛えていた。

本場。質。そんな言葉が連想される。なめらかな表面に白い模様がつけられたそれは、胸を高鳴らせるに足るほどの上品さに飾り立てられていたのだ。

どうやら私は、本場のカレーというものを知らなかったらしい。

「はいコチラどうぞー」

続いて何やら小型のバスケットが置かれる。セッotteてまだ何かあったつけ、と思ったがその瞬間。

「ナン……だと……!?」

私は図らずも驚愕することになった。なんてことはない、そういえば頼んでいたナンが来ただけなのだ。

だが、その大きさを目の当たりにした時の驚きといったらカレーの比ではない。

巨大なのだ。その長さ、わかりやすいよう旧約聖書中の単位で表すと軽く1アンマはあるだろう。息を呑む。

「……いただきます」

セッotteは揃ったようなので早速そのナンにかぶりつく。人の腕ほどはありそうな巨体は、焼きたてはやほやのアツアツで、ふわふわのもちもちのうまうまだった。

そこで、気付く。注文から少し待ったのは、これを焼いてくれたからなのだ。

嬉しくてたまらず、私はカレーにも食指を伸ばした。コクのあるチキンカレー。お肉もくどくない程度にごろごろと入っており、しっかりと歯ごたえがあるにもかかわらずちょうどいい塩梅で崩れる火の通りよう。

ルーもいい。しつこくなくて、あっさりしすぎない。辛さは数ある中から中辛でお願いをしたのだが、食べて

いる間は付きまとわないのに飲み込んでからすつと香る辛さがカレーとしての奥行きを証明している。「どうぞですかー?」

「すごく……おいしいです……」

だが中辛でも個人的には標準レベルだ。この巨大ナンがあるのだつたらもつと辛くてもよかったかもしれない。

次回はそうしよう、絶対また来よう。考えながら私はひたすらに本場のカレーに没頭した。ナンにざらりと塗ってあるバターも馨しい。サービスで置いてくれた

チャイに感動して、変にやけてしまいながらむさぼり続ける。カレーだ、これが私の食べたかったカレーだ。

しばらくすると誰かが来店して、店の方の明るい挨拶が聞こえると共に冷たい外の空気が足元をくすぐった。

私の額には、幸せな汗が浮かんでいる。

最終章…いつもの場所でいつもの(2500円前後)

昼ではなく、夜。二十時半を回った私のお腹は今日も元気に空腹を訴えていた。

金曜日の街は週末なだけあって心なしか解放感に満ちて見える。私も先ほど所属サークルの定例行事を終わらせたばかりなので、それも関係しているかもしれない。

それにしてもお腹が空いていた。五限後に図書館下の「林業珈琲」か「メイメイマート」で軽食を買えばよかったと思う。そうじゃないとしたら、駅の正面にある

「南欧」とかいうパン屋さんか「ウェイサブ」とかで。

しかし、よくよく考えれば夕飯も食べずにお互いの作品に意見を出し合う文芸部員というのは、なんだかストイックに見えて笑えてくる。いや、実のところ私自身

もそこにいて、話を聞いたり稀に話したりすることはキライじゃないのだが。

ともかく、批評会を終えた私、いや私たちはぐだぐだといつも通りの締まらない雑談をしながら目的地に向かって歩いてた。

すぐに着く。駅から東に五分もかからないだろうか、それは屋こそは並んでいる建物たちの存在に埋もれてしまふ小さな店だが、夜に訪ねれば温かい活気に溢れた様子に出会うことができる、そんな店だった。

——沖縄料理「みやこ」。

引き戸を開けて中に入り、他の人たちに続いて二階に上がる。そして上がる際に脱いでいた靴を棚に納め、

見慣れたL字型の個室に入る。

テーブルには既にお通しで注文された料理が並んでいて、なんだか帰ってきたというか、ああみやこに来ていな、という感覚に浸ることができた。時々参加人数が少なくと商店街の「グアスト」になることもあるのだが、サークル活動の締めはこじやなくては務まらない。

どことなく浮かれた雰囲気の中、各々が自分の座布団に座る。いつもだいたい学年で固まり、手すきの人が

飲み物を注いでいくのだ。

私も適当な場所に腰を下ろし、グラスを回しながらお通しを見る。みやこで特に好きな「唐揚げ」を発見。

この店で初めて食べた料理がこれだった。

飲み物が行きわたるにつれ自分の中のテンションが上がっていく気がする。

私は、ここで過ごす時間はわりと好きだ。美味しいものを食べて、ぼーっとして、先輩たち同士の話をこっそり聞いて、流れてくる煙草の煙をこの時ばかりは心地よく思いながら、遠くの雑談や知らない分野の語り合い

に耳を傾ける。今しかない、素敵な時間。

ほどなくして各自一様に落ち着いたのか、誰からもなく乾杯の音頭が上がり、私たちの宴が始まる。

さっそく私は好物の唐揚げに箸を伸ばした。

「いただきます」

そして口に運ぶ、その味は……。

食べたことのない人は、ぜひとも味わってみて欲しい。

おわり